

1981
昭和56年

1982
昭和57年

1983
昭和58年

1984
昭和59年

1985
昭和60年

1986
昭和61年

10 理工学部創設六〇周年・短期大学部（習志野校舎）創設三〇周年記念式典挙行

3 理工学部習志野校舎から生産工学部移転完了

9 習志野校舎12号館竣工

1 物理実験B棟竣工（習志野）

3 日本大学講堂（西園）廃止

7 日本大学会館設置、本部移転

9 理工学部第一部並びに理工学部第二部を「理工学部」と改称

7 「工科山の家」使用中止

9 第七代総長に高梨公之就任

建築学科に建築学コース・企画経営コース設置

電子工学科に電子工学コース・情報科学コース設置

薬学科に薬学コース・生物薬学コース設置

11 理工学部大講堂兼体育館竣工（習志野）

機械実習所竣工（習志野）

7 第八代理工学部長に木下茂徳就任

11 理工学部関係物故者追悼慰霊祭挙行（遺族七三名参加）

▼ソ連、チエルノブイリ原発事故
▼スペースシャトル「チャレンジャー」爆発

▼日航ジャンボ機 御巣鷹山に墜落



第八代理工学部長
木下茂徳



▼グリコ・森永事件

▼大韓航空機撃墜事件

▼日本海中部地震

▼東京ディズニーランド開園

▼ホテル・ニュージャパン火災

▼福井謙一、ノーベル化学賞受賞



▼一億円争奪事件

▼イラン・イラク戦争勃発（1988年終結）

数学科の歩み

実学や生命力を重んじる学科の伝統

▶学科創設のころ

数学科創設は1959（昭和34）年。大学院数学専攻の設置は1963（昭和38）年。当時の理工学部長 横地伊三郎が、積極的にはたらきかけ、宇野利雄、河口商次、蟹谷乗養の3名が創設の中心となった。創設にあたり、横地・宇野両者の時代の先を読んだ駆け引きにより、当時、一大学に置くものとしては破格のリレー式計算機“FACOM128B”が据え付けられた（富士通株沼津工場 池田敏雄記念室展示）。

▶私学独自の新しい数学科像

当時、数学科のほとんどは国立大学にしかなく、国立型が当然視された時代であった。私学には独自の理念と基盤があり、別のあり方があって然るべきである。本学科では、それが、ある程度試みられた。

それには、宇野の考えによるところが大きい。宇野は一高、東京大学出身の典型的国立出身エリートであったが、秀才タイプを好まず、従来通りの数学科をつくらうとはしなかった。また、文書による規制を好まず、形には残さなかったが、人格を通じ、気風として、学生や教員に新しい数学科像を与えた。宇野は、教育、研究の土台に多くの知識、学力を仮定せず、論理、抽象よりも具体を重んじた。それは当時の（いや、現在でも）数学にそぐわず、感覚は

理解されても、実行が難しいと思われた。従来の紋切り型教育を受けた学生は、不満を感じただろう。それでも、卒業生から、大企業の役員や、電子計算機の開発や、諸システムの構築に重要な貢献をした者たちが多く出たのである。授業形態とは別に、「学校秀才尊からず」という雰囲気はあり、学生は、紋切り型教育を跳ね返す生命力と優れた資質をもっていたのである（学科同窓会桜数会ホームページ：<http://math50.math.cst.nihon-u.ac.jp/> 参照）。

▶平成期における教育・研究体制の再構築

少子化が進み、表面的には世界基準で判定されるようになった今、再び独自のあり方が問われている。

学科の教育、研究体制の新たな構築をいかにすべきか。幸いにも、本学科には、理屈より実学を重んじ、学校秀才より生命力を重んじる宇野の考えがまだ生きており、平成の世においても、学科の指針となっている。その伝統を具体的に反映させるため、数度のカリキュラム改定が行われた。また、計算機センターと学科を端末で結んで、研究、教育が行われるようになった。さらに、本橋洋一がフィンランド科学アカデミー終身外国人会員に選出され、松元重則が日本数学会幾何学賞を受賞するなど、教授陣の活躍も目覚ましいものがある。